

総合看護実習における学生の視点から見たチームケアの強み

村 田 由 香

【研究報告】

総合看護実習における学生の視点から見たチームケアの強み

村 田 由 香*

【要 旨】

本研究の目的は、総合看護実習において、学生の視点からみたチームケアの強みをどのように捉えているのかを明らかにすることである。総合看護実習を終了した4年生のうち一般総合病院で実習を行ったチームケア・チーム活動をレポートタイトルにした44名のレポートをBerelson, B.の内容分析を用いて分析した。結果、【統一したケア実践のための情報共有】【臨床における協力体制の充実】【看護師相互の良いコミュニケーション】【看護リーダーのリーダーシップ力】【他職種との連携】【チームによるスタッフ教育】【チームの一員としての個人の責任と能力】【チームで築く信頼関係】【看護師のモチベーションの向上】【チームの特徴に適した看護体制】の10カテゴリーがあった。学生は、チームケアの中から看護職者としてのメンバーシップやリーダーシップのありようを見出すことができた。また、看護をマネジメントすることに関する能力については【看護リーダーのリーダーシップ力】【臨床における協力体制の充実】をチームケアの強みの中から見出し、理解を深めることができた。

【キーワード】 チームケア, 看護学生, 内容分析

I. 緒 言

医療の高度化・複雑化が進む中で、実際の臨床現場と看護基礎教育との乖離や新人看護師の看護実践能力の低下が指摘されている。また、「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」（厚生労働省, 2007）では平成21年度改正カリキュラムの要点として、卒業後、臨床現場にスムーズに適応できることを目的に、看護の統合と実践としての教育内容の充実について述べられている。具体的には、臨床実践に近い形で学習し、知識・技術を統合する内容、チーム医療の理解を深め、チームの一員として複数の患者を受け持つことなどがあげられている。

看護系の大学においては、「総合看護学実習」や「総合実習」と称して、4年間の学びを統合するような実習を展開している大学（豊増, 岩井, 2001; 山本, 2006; 川上, 森下, 2007; 西尾他, 2007a, 2007b; 高橋, 松岡, 梶, 村岡, 奥野, 2007; 佐々木, 西田, 濱田, 2008）や「看護管理学実習」と称して、目標管理をテーマに展開している報告（賀沢, 山田, 海老, 2004）がある。

A看護大学では、平成21年度の指定規則改正に先駆けて、平成19年度より、一看護単位に少人数の学生を配置し、学生が看護チームの活動に実際に参加

し、チームケアの課題や強みを見だし、ヒューマン・ケアリングの理解を深めるように総合看護実習の体制を整えている。そして、学生のレディネスを高め、教員と実習施設指導者が実習目的や方法を共有して指導にあたり、実践能力の向上を図っている。総合看護実習においては、事前から学生が主体的に、実習前に臨床において課題となっていることを取り上げ、事前学習をし、自己目標と実習計画を掲げて、実習に取り組めるように企画している。

本研究では、総合看護実習において、学生はチームケアの課題や強みをどのようにとらえているのかを明らかにし、今後の総合看護実習に関する実習目標および評価項目検討の一助とするために、本研究に取り組んだ。

II. 総合看護実習の概要

4年次前期までの領域別看護学実習では対象者1名を受け持ち、援助的人関係を築きながら、問題解決思考を適用して看護ケアを実践するという方法を中心に学習を行っている。その際には、対象者の健康障害だけでなく、その人の生活の場とライフサイクルを含めた全体像を捉え、チームアプローチの重要性を考慮したケアを目指している。それゆえ、対

* 日本赤十字広島看護大学 基盤看護学

象をとりまく環境を保健医療福祉という総合的な視野で捉えることや、実習場のスタッフメンバーと建設的な人間関係を作ることも必然的に要求されている。

しかし、実際の学生の経験や能力では、受け持ち対象の看護ケアに重点が置かれ、チームや組織の側面から看護ケアを見据える機会を得ていない。そこで、総合看護実習は、これまでの実習を総合するような実習として、保健医療福祉チームで行われるチームケアのありようについて学ぶこと、ヒューマン・ケアリングの視点でチームケアの課題に気づき解決策を考えられることを実習目的・目標としている。

実習目標は以下のとおりである。

- 1) 保健医療福祉チームにおける看護活動の展開の実際に参加し、以下のことを理解する。
- (1) 保健医療福祉チームにおける看護チームの位置づけ、ならびに看護チームの目標と看護体制を理解する。
- (2) 看護チームメンバーが協力し、効率的に看護活動を展開していくための、目標共有、役割分担、情報伝達のありようを理解する。
- (3) 看護チームの目標達成に向けたチームメンバー間のコーディネートのありようを理解する。
- 2) ヒューマン・ケアリングの視点から施設の特徴を捉え、看護チームのチームケアの課題や強みを見出し、その根拠および解決策を考え明示する。
- (1) 日々の実習目標と計画を具体的に立て、自発的に実施できる。
- (2) ヒューマン・ケアリングの視点から、看護チームのチームケアの課題や強みを明確にし、考察することができる。
- (3) 文献や助言を活用して課題解決のための建設的な方法や対策を検討できる。

これらの実習目標を達成するために、学生は各自、自己の課題を明確にし、事前目標をあげ、主体的に行動計画を立てて実習に臨んでいる。

なお、実習施設は、一般総合病院、精神病院、訪問看護ステーション、老人保健施設、特別老人ホーム、保健センターなど合計21施設である。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン：質的記述的デザイン

2. 用語の定義

チームケアとは、チームの共有目標のもとに他の

メンバーが協働して介入し、協力してケアの枠組みをつくり実践していくことを示す。ここで示すチームには、看護職単位のチームと医師・看護師・理学療法士・栄養士など職域を越えたメンバーで構成される医療チームがある。

3. データ収集期間

データ収集期間は平成20年11月

4. 研究対象

平成20年にA看護大学の総合看護実習を終了し、本調査に協力を得られた4年生の最終課題レポート「実習施設のチームケアのありよう、課題や強み、その根拠及び解決策」について記述されたもの(4000字～4800字)のうち、一般総合病院において実習し、「チームケア」「チーム活動」をレポートタイトルにした44名のレポートを研究対象とした。

5. データ収集

総合看護実習の評価が終了し、学生の承諾を得られた課題レポートのうち、「チームケアの強みや課題と捉えた事柄」について記述されている部分を使用した。

6. データの分析方法

1) 学生の実習終了時の課題レポート「実習施設のチームケアのありよう、課題や強み、その根拠及び解決策」についてまとめたもの(4000字～4800字)を Berelson, B. の内容分析を用いて分析した。本研究のデータは、研究参加に同意を得られた学生の実習課題レポート、すなわち言語的に記述されたコミュニケーションの内容をデータとするため、Berelson, B. の内容分析を用いることとした。具体的な方法は以下の通りである。

- (1) レポートに記述されているチームケアについての強みや課題の内容を抽出する。
- (2) 内容が一文一義であるように記述を区切り、1記録単位とする。
- (3) 個々の記録の内容の類似性により機能的に分類・抽象化し、カテゴリー化する。
- (4) 最後に、各サブカテゴリー・カテゴリーに分類された記録単位の出現頻度・比率を算出する。

7. 分析の妥当性

看護学修士号をもつ看護管理学の教員1名に分析の一部を依頼し、Scott, W. A の式による一致率の算出をもとに、信頼性を検討した。

8. 倫理的配慮

学生には、教員による実習評価が終了し、実習評価を記載した実習ファイルを返却した後に、口頭及び文書にて研究目的、方法を説明した。なお、課題レポートについては、口頭で学生の承諾を得た上で、

毎年、総合看護実習企画の参考にするために、コピーを1部ずつ保存している。そして、次の10事項について十分に説明、約束し、承諾を得られたものを研究対象とした。

①研究協力は自由意志であること、②レポートは総合看護実習企画の参考にコピーして提出しているものを用いること、③記述の中でチームケアのありようについて述べられている部分のみ使用すること、④データとして使用してほしくない部分があれば申し出てもらうこと、⑤レポートは名前を切り離して使用すること、⑥データは匿名で分析すること、⑦研究協力に拒否しても不利益は全く受けないこと、⑧使用するレポートについて筆者以外の本学内看護学教員である第三者に学生による承諾を得られたものであることの確認を受ける、⑨学生の承諾を得られていないレポートについては、研究終了時まで筆者以外の本学内看護学教員である第三者に保管してもらうこと、⑩承諾書の受付は、A看護大学事務局に設置した。

なお、本研究は対象レポートの記述学生が在籍する機関の研究紀要委員会研究倫理審査の承認を受け、実施した。

IV. 結 果

分析対象となった一般総合病院で実習を行った44名の記述したチームケアについての記述は、課題を記述したものはなく、チームケアの強みとしてすべて記述されていた。そのため、チームケアの強みに関する記述を225の記述単位に分割し、分析した。その結果、学生の視点から見たチームケアの強みの10カテゴリーを形成できた(表1参照)。

なお、Scott, W. A の式による一致率は71.3%であり、10カテゴリーの信頼性は確保された。

学生が捉えたチームケアの強みはもっとも多かったものが【統一したケア実践のための情報共有】67記述単位であり、同一記録単位群として「カンファレンスや申し送りでの情報共有」「チーム活動による情報共有」「看護場面での情報共有」「カルテなどによる情報共有」があった。具体的な記述には、初めてチームで情報を共有し患者をケアすることの重要性に気づいた、カンファレンスによって一人の患者の情報をスタッフ全員で共有し、一貫したケアが提供できることがチームケアの強みである、という記述があった。

次いで【臨床における協力体制の充実】について35記述単位であり、「メンバー相互の協力体制」「チームを超えた協力体制」「職位を超えた協力体制」

の同一記録単位群があった。具体的記述内容には、メンバーが自分の役割を超えて、互いに協力し合っ

てケアをしている、チームの業務に偏りがあっても声を掛け合い、協力している、係長は患者ケアのフォローにも入っているなどの記述があった。

【看護師相互の良いコミュニケーション】については29記述単位であり、「メンバーの結束」「雰囲気よさ」「相互尊重による意見交換の自由さ」「インフォーマルなコミュニケーションの重要性」「コミュニケーション能力の重要性」の同一記録単位群があった。具体的記述内容には、自分の意見を言いやすい環境、スタッフ同士の強い信頼関係がある、師長・チームリーダー・メンバーがお互い遠慮せずに意見交換ができる雰囲気、スタッフ間のコミュニケーションによる報告・連絡・相談がスタッフの結束を高める、などであった。

【看護リーダーのリーダーシップ力】についても、29記述単位であり、「リーダー役割の理解」「リーダーシップ力の重要性」「師長・係長の役割の理解」が同一記録単位群であった。具体的には「リーダーの役割」にはプリセプターのサポーター的役割・チームのマネージャー的存在・ムードメーカー的存在・参加型リーダーシップ・支援型リーダーシップ役割などがあり、それらがチームケアの強みとなっていると記述していた。また、師長がスタッフのモチベーションを高めている、師長・係長がスタッフのストレスを軽減できるようにしている、師長・係長が連携して職場風土を作り上げている、などの記述があった。さらに「リーダーシップ力」として、専門的スキル・対人的スキル・概念化スキル・判断力・決断力・看護業務の調整能力・計画立案力などを記述していた。

【チームによるスタッフ教育】は、24記述単位であり、「教育的環境としてのチーム」と「チームによる新人教育」の同一記録単位群があった。「教育的環境としてのチーム」については、人を育てる環境であることや、看護のレベルをチームで保ち、チーム全体で育っていくように目指している、などの記述があった。「チームによる新人教育」については、新人の力量に合わせた指導をする、日替わりチームリーダーによるチーム内の新人教育などが具体的に記述されていた。

【チーム医療における他職種との連携】は、15記述単位であった。医師や他職種との橋渡的存在やチーム医療の中で患者や家族の代弁する役割を担っていると記述のあった「コーディネーターとしての看護師の役割」や看護師が交渉力を持って他職種と

表 1. 学生の視点からのチームケアの強み

総記録単位数 = 225

カテゴリー	同一記録単位群	記録単位数	
統一したケア実践のための情報共有	カンファレンスや申し送りでの情報共有	28	67 (30%)
	チーム活動による情報共有	18	
	看護場面での情報交換	18	
	カルテなどの記録による情報共有	3	
臨床における協力体制の充実	メンバー相互の協力体制	26	35 (16%)
	チームを超えた協力体制	6	
	職位を超えた協力体制	3	
看護師相互の良いコミュニケーション	メンバーの結束	9	29 (13%)
	雰囲気のよさ	8	
	相互尊重による意見交換の自由さ	7	
	インフォーマルなコミュニケーションの重要性	3	
	コミュニケーション能力の重要性	2	
看護リーダーのリーダーシップ力	リーダー役割の理解	11	29 (13%)
	リーダーシップ力の重要性	11	
	師長・係長の役割の理解	7	
チームによるスタッフ教育	教育的環境としてのチーム	15	24 (11%)
	チームによる新人教育	9	
チーム医療における他職種との連携	看護師の交渉力の重要性	11	15 (7%)
	コーディネーターとしての看護師役割	4	
チームの一員としての看護師個人の責任と能力	個々の看護師のチームの一員としての役割意識	5	13 (6%)
	個々の看護師の看護実践能力	3	
	個々の看護師の強い責任感	3	
	患者中心の志向性	2	
チームで築く患者との信頼関係	チームで統一したケアが患者との信頼関係を築く	7	7 (3%)
看護師間の相互尊重によるモチベーションの向上	看護師の相互尊重による達成感・充実感・モチベーションの向上	4	4 (2%)
チームの特徴に適した看護体制	固定チームナーシングと機能別方式の併用のよさ	2	2 (1%)

協働することなどの「看護師の交渉力の重要性」が同一記録単位群であった。

【チームの一員としての看護師個人の責任と能力】は13記録単位であった。ケアは自分ひとりで行っているのではないという意識を持っているなどの記述のあった「個々の看護師のチームの一員としての役割意識」や「個々の看護師の看護実践能力」「個々の看護師の強い責任感」「患者中心の志向性」が同一記録単位群としてあった。「個々の看護師の強い

責任感」については、一人ひとりが責任を持っているからこそ、チームとして成り立つなどの具体的記述があり、「患者中心の志向性」については、業務の優先順位は効率より患者重視などの具体的記述があった。

【チームで築く患者との信頼関係】は7記録単位であり、「チームで統一したケアが信頼関係を築く」が同一記録単位群であった。

【看護師間の相互尊重によるモチベーションの向

上】は4記録単位で、「看護師の相互尊重による達成感・充実感・モチベーションの向上」が同一記録単位であった。

【チームの特徴に適した看護体制】は2記録単位で、「固定チームナースングと機能別方式の併用のよさ」が同一記録群であった。

V. 考 察

1. 学生の視点から見たチームケアの強み

1) チームでの情報共有による統一された質の高いケア実践

今回、研究対象となった学生の実習施設は、ほとんどが固定チームナースング制を導入していた。本研究の結果として、得られた10カテゴリーのうち、もっとも多かったのは【統一したケア実践のための情報共有】であった。そして【臨床における協力体制の充実】【チームによるスタッフ教育】【看護師間の相互尊重によるモチベーションの向上】のカテゴリーから、固定チームナースングの目的（西元，杉野，2005，chap. 1）である①患者に責任を持って継続した質の高い看護を実践する，②看護スタッフのやりがい感・自己実現を目指す，③看護スタッフの育成，の3要素を学生自身が意識的に体験できたことを臨床現場のチームの強みとして、認識することができているといえる。

情報共有の視点では、学生は、各施設によって、異なる実習指導体制において、1年次から4年次まで、実際にチームカンファレンスに参加し、情報共有、看護計画の共有を体験できる場合と、チームカンファレンスに参加できない場合がある。今回の研究対象である課題レポートには、総合看護実習において「初めてチームで患者をケアすることの重要性に気づいた」という記述や、「一人の患者の情報をスタッフ全員で共有し、一貫したケアが提供できることがチームケアの強みである」という記述が多かった。しかし、基礎看護学実習のときから、実習指導教員や臨床実習指導者の指導によって、チームケアのあり方に気づくことや情報共有することで、統一したケアを実践できる体験をすることは、十分に可能である。今後は、基礎看護学実習のときから、学生の受持ち患者の看護計画をチームで共有し、情報共有する一員として自覚できるような場作りの必要性も示唆された。

2) チームの一員としての責任と能力とコミュニケーション能力の重要性

チームケアの強みとして【チームの一員としての看護師個人の責任と能力】のカテゴリーが示すように、チームの一員であることを自覚するためには、その看護チームの一人ひとりが、どのような価値観を共有し、看護の質の向上を目指し、チーム間で統一したケアを提供しているのかを実習という体験を通してわかることが、非常に重要である。高田（2006）は、スタッフが、「チームの一員」として学生を意識することは指導の負担感を軽くする。一方で学生は、チームへの帰属意識と責任感もて、意欲をかき立てられ、看護の魅力や面白さに気付くと述べている。このような相互の体験は、総合看護実習以外でも十分に可能であり、実習生でありながらも、チームの一員であるという責任感と自覚の涵養としての教育的効果が高い。

また、チームケアの強みとして【チーム医療における他職種との連携】がある。3年次からの各領域別看護学実習の目標には、医療チームの一員としての役割理解や他職種との連携についてあげられてはいる。しかし、実際には、一人の受け持ち患者での看護展開を行っているため、他職種との連携について十分な体験や理解ができていなかったことが推察される。総合看護実習においては、チームのメンバーとして意図的に位置づけられることで、「看護師の交渉力の重要性」や「コーディネーターとしての看護師の役割」の重要性をチームケアの強みと捉えたと考える。

学生が、実習の過程において、チームの一員であるという自覚を持つためには、他職種との連携の体験だけでなく、複数の患者を責任を持って受け持つことも必要である。これからの総合看護実習では、複数の患者を積極的に受け持てるような指導体制を整える必要もある。

学生は、4年次の後半になると、半年後には就職を控え、近い将来、新人看護師として、医療チームや看護チームの中に入っていかなければならない不安感が生じ、これによって「人間関係」や「個人の能力」に関心が高くなっている可能性もある。これらは、組織社会化の次元である「遂行能力の熟練」「人間関係」など個人が組織に適応していくために自らのアンテナを張りめぐらせる努力が必要になる。しかし、個人の努力だけには限界があり、組織においてもフォーマル、インフォーマルな支援が必要になる（勝原，2004，chap. 1）。総合看護実習では、主体的に目標到達のために、自らの力でスタッフに自分がどう行動するのか

と毎日交渉し、学生でありながらもチームの一員であることを自覚する場面が多くチームメンバーとの関わりの中で、適応していく体験をしている。

これらのことから、学生の視点から見るとチームの強みとなることは「メンバー相互の、チームや職位を超えた、協力体制」であり、学生は「雰囲気の良い」「相互尊重による意見交換の自由」な【看護師相互の良いコミュニケーション】と捉えるのではないかと考える。

3) 人材育成の場としてのチームケア

新人看護師が職場の不適応を起す要因のひとつにリアリティショックがあげられる。総合看護実習では、まず、自分がチームの一員として迎え入れられ、チームの一員として、何をどう判断しメンバーシップをどのように発揮するのか、主体的に考える機会を多く得るようにしている。その意味においては、4年次後期に実施するこの総合看護実習は、臨床との架け橋の役割を持つこともねらいとしている。したがって、学生は、身近な新人看護師がどのようにそのチームで育っていくのか、育てられるのかという関心を高く持って、自己の課題として実習に臨む場合も多い。メンバーとしてチームの中でケアをどのように実践し、他者とどのようにコミュニケーションをとりながら、役割を果たすのか、現場のコミュニケーションのよさ、看護師同士の相互関係のあり方への注目も高まっていることが推察できる。そして、これから看護師として、どのように自分が育っていくのかという期待と不安から【チームによるスタッフ教育】や【看護師の相互尊重によるモチベーションの向上】などがチームの強みとして捉えられていると考えられる。従って、チームケアは、健康問題を持つ対象者だけでなく、チームメンバー同士の中でも相互のケアとしての意味を持つ。

今回の課題レポートの分析結果において、【臨床における協力体制の充実】や【看護師相互の良いコミュニケーション】などのいわゆる「人間関係」に関する記述が多いのは、就職を目前にして、チームのメンバーになる自分を洞察できる機会を得ているということも推察できる。「チームの一員」となる実習の効果については、山本（2006）が述べているように、学生自身の責任感の自覚、臨床スタッフの「学生と一緒に看護を行う仲間である」という意識の変化があげられる。そして、臨床実習がより良い教育環境に発展していくことが期待できる。このことから、総合看護実習だけ

でなく、2年次、3年次からでも「チームの一員」という意識を相互に持つことができるような指導方法の工夫が必要であろう。

また、【看護リーダーのリーダーシップ力】については、「師長・係長の役割」「リーダーの役割の理解」「リーダーシップ力の重要性」の同一記録単位群があり、リーダーシップ力の育成が、チームの中でどのように行われているのか、臨床において看護のマネジメント力がなぜ必要なのか理解を深めていることがわかる。チームナースの成功の鍵はリーダーの果たすリーダーシップにかかっており（杉野, 2008. chap. 2）、チームのリーダーがメンバーをまとめ、人間関係を築くプロセスを作れば、メンバー同士が互いに助け合うことになる（Edger. H. Schin, 2009/2009. chap.7）ことを看護チームのメンバーとして理解したと考えられる。

2. 今後の総合看護実習の実習目標・評価項目検討への示唆

平成21年度の看護基礎教育カリキュラムでは、チーム医療及び他職種との協働の中で看護師としてのメンバーシップ及びリーダーシップや看護をマネジメントできる基礎的能力の育成を提唱している。

本研究の結果から、学生がチームケアの強みとして見出した10のカテゴリーは、看護職者としてのメンバーシップやリーダーシップのありようをチームケアの中から見出すことができたことを示していると考ええる。また、看護をマネジメントすることに関する能力については【看護リーダーのリーダーシップ力】としてのリーダーシップ能力、【臨床における協力体制の充実】から理解を深めることができたと考ええる。

今後は、4年間の集大成としての総合看護実習において、チーム医療及び他職種との協働の中で看護師として基礎的能力の到達度を評価項目として明文化する必要がある。そして、指導体制、教育内容の工夫も必要である。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、一般総合病院において総合看護実習を行った学生の課題レポートの内容から、分析した。「チームケア」という視点から見ると、一般総合病院だけでなく、精神病院、老健施設においても「チームケア」は展開されている。しかし、今回は、それぞれの施設において、看護体制などが大きく異なることから、一般総合病院に限定して、チームケアの

強みを明らかにした。今後は、多様な施設においても、学生が捉えたチームケアの強みや課題を明らかにし、実習目標・評価項目の検討に活かしたい。

VI. 結 論

本研究において、以下のことが明らかになった。

1. 総合看護実習のレポート分析をした結果、学生の視点から見たチームケアの強みは、10カテゴリーが抽出された。総合看護実習において、学生から見たチームケアの強みとして、最も記録単位数がもっとも多かったものは、【統一したケア実践のための情報共有】であった。
2. 学生は、チームケアの中から看護職者としてのメンバーシップやリーダーシップのありようを見出すことができた。また、看護をマネジメントすることに関する能力については【看護リーダーのリーダーシップ力】【臨床における協力体制の充実】をチームケアの強みとして見出し、理解を深めることができた。

謝 辞

本研究を行うにあたり、快くご協力くださいました卒業生の方々に心から感謝申し上げます。本研究は、第10回日本赤十字看護学会学術集会において一部を発表いたしました。なお、平成20年度日本赤十字広島看護大学奨励研究費の助成を受けて実施いたしました。

引用文献

- Edger, H. Schin (2009) / 金井壽宏 (2009). 第7章 チームワークの本質とは、人を助けるとはどういうことか(第1版). (pp.175-206), 東京, 英知出版.
- 勝原裕美子 (2004). 第1章 組織とは何か. 看護管理学習テキスト2. 看護組織論 (第1版), (pp.1-62), 東京, 日本看護協会出版会.
- 賀沢弥貴, 山田聡子, 海老真由美 (2004). 目標管理を教材とした看護管理学実習の分析 学生のアンケート調査の結果から. 看護管理, 14 (7), 558-564.

川上由香, 森下晶代 (2007). from KOBE 「後輩」を育てる総合実習 総合実習で学生も変わる, 教員も変わる 看護教員としての視点, 看護学雑誌, 71 (1), pp64-70.

厚生労働省医政局看護課 (2007). 「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書.

西元勝子, 杉野元子 (2005). 第1章 固定チームナーシングのめざすもの. 固定チームナーシング (第2版). (pp.2-25), 東京, 医学書院.

西尾ゆかり, 太田節子, 藤野みつ子, 餅田敬司, 穴尾百合, 佐々木あゆみ, 井下輝代 (2007a). 本学における総合看護学実習Ⅰに対する学生評価と今後の課題 実習満足度アンケートの分析から, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 5 (1), 101-104.

西尾ゆかり, 太田節子, 藤野みつ子 (2007b). 総合看護学実習Ⅱ (看護管理) で得られた看護学生の学び, 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 5 (1), 58-63.

佐々木幾美, 西田朋子, 濱田悦子 (2008). 看護学総合実習に対する卒業生の評価. 日本赤十字看護大学紀要, 22, 49-60.

杉野元子 (2008). 第2章 小集団の活性化とリーダーシップ, 看護集団活動 組織の活性化とリーダーシップ (第3版). (pp.25-98). 東京, 看護の科学社.

高田早苗 (2006). 「後輩を育てる」総合実習 合言葉は「チームの一員」, 看護学雑誌, 70 (12), pp.1147.

高橋秀子, 松岡清子, 梶喜子, 村岡愛子, 奥野美和 (2007). 複数受け持ち性実習から総合実習への展開. 看護展望, 32 (7), 679-686.

豊増佳子, 岩井郁子 (2001). 「総合実習: 看護提供システム」の3年間の経緯. 聖路加看護大学紀要, 27, 72-79.

山本裕佳子 (2006). 「後輩」を育てる総合実習 (第4回) 「チームの一員」との考えがスタッフと学生を変えた 臨地実習指導者としての視点, 看護学雑誌, 70 (12), 1142-1146.

Students' perception of the advantages of team care during comprehensive nursing practicum.

Yuka MURATA*

Abstract:

The purpose of this research was to clarify how the advantages of team care were perceived by students during comprehensive nursing practicum. The analysis using B. Berelson's content analysis method was conducted of reports entitled Team Care and Team Activities written by 44 senior students who had completed comprehensive nursing practicum at general hospitals. The following ten categories were generated: "information sharing for implementation of uniform care", "enhancement of cooperative systems during clinical practice", "open communication between nursing staffs", "leadership ability of head nurses", "staff education by the team", "cooperation with other professions", "individual responsibility and ability as a team member", "a trust relationship established within the team", "improvement of nurses' motivation", and "a nursing system suitable for team characteristics". Regarding the ability of nursing management, students deepened their understanding and found strength of "leadership ability of head nurses", "enhancement of cooperative systems during clinical practice" from the team care.

Keywords:

team care, nursing student, content analysis

* Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing